

ガマが語る沖縄戦の実相（読谷村編）

第1部 「座喜味城址公園」にて データー座喜味城跡

【座喜味城の看板の前にて】

- ☆ 読谷座喜味城の歴史を知る
 - * 中世三山時代の中山護佐丸の居城
 - * 戦時中、日本軍の高射砲の陣地
 - * 戦後のアメリカ軍のミサイル追撃レーダー基地
 - * 現在、読谷の平和文化の発信地
(野外劇などの文化活動)



【城壁の上から】

- ☆ 1945年4月1日、米軍の沖縄上陸当時の様子を知る **JPG** データー・米軍上陸地点
 - * なぜアメリカ軍は読谷、北谷の海岸線から上陸したのか？
 - ・ 日本軍の中飛行場、北飛行場を占領する
 - ・ 沖縄本島を南北に分断（本島のくびれ目）
(沖縄全島の地図・・・沖縄戦の上陸時)
 - * アメリカ軍の上陸の様子を予想する
(東シナ海を埋め尽くすアメリカ艦隊の写真)
(艦砲射撃ではちの巣の状態の読谷の土地)
 - * なぜ日本軍は読谷を守らなかったのか？
 - * ここを守っていた日本軍はどこへ行ったのか？
- ☆ 読谷の住民はどうしたのか？
「予想」
- ☆ 読谷にたくさんあった鍾乳洞（ガマ）のこと
(あの艦砲射撃でも生き残ったのは地下にガマがあったから)
 - * チビチリガマとシムクガマの位置を説明しておく
- ☆ 読谷を中心に中部一帯の米軍基地の説明
(沖縄の軍事基地の地図)



第2部 「チビチリガマの前にて」 データー・チビチリガマ

- ☆ チビチリガマの碑文をよむ 碑文データー（一太郎）
 - * 死亡した83名の年齢と性別を調べる
「気付いたことを発表する」
 - ・ 家族で亡くなっている
 - ・ 12歳以下の子どもが多い
 - ・ 女性と老人が多い



- ・ 手榴弾で亡くなった人もいる

チビチリガマから世界の平和の祈りを

一九四五年四月一日、米軍はこの読谷村の西海岸から沖縄本島へ上陸した。

それは住民を巻き込んだ悲惨な沖縄戦・地上戦であった。その日のうちに米兵はチビチリガマ一帯に迫っていた。翌二日、チビチリガマに避難していた住民約一四〇名中八十三名が「集団自決」した。尊い命を喪った。

あれから三十八年後、やっと真相が明らかになった。その結果、八十三名のうち約六割が十八歳以下の子供たちであった。その他、二名が米兵の手によって犠牲になった。

「集団自決」とは「国家のために命を捧げよ」「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪過の汚名を残すことなかれ」といった皇民化教育・軍国主義教育による強制された死のことである。

遺族はチビチリガマから世界の平和へ祈りをと「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」を彫刻家金城実氏と住民の協力のもとに制作した。しかし、像の完成から七カ月後、十一月八日、心なき者らによって像は無残にも破壊された。住民は怒り遺族は嘆いた。

全国の平和を願う人々はそのことを憤り、励ましと多大なカンパを寄せた。あれから七年余が経過し、チビチリガマの犠牲者への追悼と平和を愛する全ての 人々の思いを込め

沖縄戦終結五〇周年にあたり

ふたたび国家の名において戦争への道を歩まないことを決意し、ここにこの碑を建立する。

一九九五年四月二日

チビチリガマ遺族

☆ チビチリガマの中で何が起こったの？
証言をよむ（読谷村史「集団自決」から）

☆ なぜ83名が「集団死」をしたのか？

「予想」

- ・ 皆が死のうと言ったから
- ・ アメリカ軍に殺されるよりましと思ったから
- ・ 捕虜になるより「自決しろ」と教えられたから
- ・ その他

☆ 「集団自決」か「集団死」か「集団虐殺」か？

☆ チビチリガマで起こったこと（集団死）の事実をみんなが知ったのはいつか？
予想

☆ 八重山の移民集落で読谷波平の出身の方から聞いた話から、作家の下嶋哲郎さんの調査活動を話す

「南風の吹く日」の紹介

☆ チビチリガマの碑文は「集団自決」をどのように書いているか

「手段自決」とは「国家のために命を捧げよ」「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪



過の汚名を残すことなかれ」といった皇民化教育・軍国主義教育による強制された死のことである。

第3部 「シムクガマにて」

データー・シムクガマ

☆チビチリガマと同じ波平区の住民1000名がなぜ助かったか
予想

☆ シムクガマ入り口の「救命洞窟の碑文」を読む
デジカメデーター・・・中部戦績・読谷村戦績・シムクガマより

☆ 碑文にある比嘉平治さんと比嘉平三さんはどういう人か？
* おじいさん
* ハワイ帰り？（説明・・・）

☆ なぜハワイ帰りの人がいたから助かったのか？

☆ チビチリガマとシムクガマの事実から何を学か？

討論

☆ 生と死の極限状態の中でも生きることの意味や尊厳をまもりぬいた人がいた

沖縄または沖縄戦の縮図といわれる読谷村。当時読谷には10数ヶ所の避難壕があった。その中でチビチリガマをはじめ3ヶ所のガマで「集団死」の事実があった。波平区にあるチビチリガマとシムクガマ、同じ村落共同体の人達が避難したが、生死を分ける対照的な事実が生まれた。

「集団死」の問題を子どもにどう語るか、どう教えるかは非常に難しい問題がある。チビチリガマでの83名の死は重くとらえなければならないが、同じ状況の中で生き残った何千名の事実はもっと重く見つめなければならない。

